

荒久台遺跡

—千葉県横芝町荒久台遺跡発掘調査報告書—

1981・3

長倉遺跡保全対策協議会
横芝町教育委員会

荒久台遺跡

—千葉県横芝町荒久台遺跡発掘調査報告書—

長倉遺跡保全対策協議会
調査主任 伊藤一男

発刊のことば

横芝町は、姥山・牛熊・鴻ノ巣など貝塚遺跡の多いことで、九十九里地方屈指であるばかりでなく、殿塚・姫塚から出土した埴輪群など、全国的に広く知られているところです。これらの埋蔵文化財は、昭和三一年以降、慶應義塾大学・早稲田大学の研究室の方々によつて発掘調査され、すぐれた学術的成果をあげて注目されました。ところが昭和四五年以降、横芝町の北部台地では土砂採取・宅地造成などが急速にすすみ、存在が脅かされつゝある遺跡も少なくなく、埋蔵文化財の保護と地域開発との計画的な調和を図ることが重要な行政課題となつております。

今回、昭和五五年度の地域農政整備事業を実施するに際して、長倉地先の荒久台遺跡の現状変更が危惧されておりました。本遺跡は、栗山川に合流する浸食谷によつて創出された標高約三三メートルの樹枝状台地の基部に位置し、台地全体に遺物が認められる古墳時代の土師器散布地であります。台地上の平坦部は、すでに開墾され畠地として利用されていますが、その地下には大規模な住居址群（村落址）が埋没しているものと考えられ、多くの研究者から注目されている遺跡であります。

横芝町教育委員会では、この遺跡の取扱いについて、県文化課・地元関係者と協議した結果、現状保存を原則に種々の保全対策を講ずることとしました。具体的には、県文化課の指導によつて遺跡保全のための対策協議会を組織、町文化財審議会の伊藤一男委員に調査主任を依頼して、①昭和五六六年一月一〇日～二〇日の一日の予定で遺構確認のための発掘調査を実施し、②二月一〇日～三月三〇日までの工事期間中、関係者への現場指導を行いました。以後、観意整理・執筆・編集に努め、ここに発掘調査の報告を公刊する運びとなりました。このさやかな冊子が、学術研究の資料として広く一般に活用されることを期待してやみません。

終りに、報告書を公刊するに際して、御協力を頂きました千葉県教育委員会・横芝町文化財審議会・長倉土地改良事業共同施行・横芝町役場産業課等、関係各位の皆様に厚く御礼を申し上げます。また、遺物整理・方法論等、終始御指導を賜わりました千葉県文化財センターの西山太郎氏、立正大学OBの小高春雄氏、そのほか、諸学の方々に深く感謝申し上げます。一方、霜枯れの凍野で、発掘調査に専念された伊藤主任・海保調査員の御努力に対し、心から謝意を表すと共に、今後一層の御精進を祈念する次第であります。

一九八一年三月

長倉遺跡保全対策協議会

横芝町教育長 井 上 武

例 言

- 一、本書は、横芝町荒久台遺跡の発掘調査の概要を記したものである。
- 一、荒久台遺跡は、千葉県横芝町長倉字荒久台一〇一〇番地外に位置する。
- 一、本遺跡は、從来は長倉A遺跡と称されたが、所在地の字名を冠して荒久台遺跡の名称を用いた。
- 一、本調査は、昭和五六年一月一〇日から同月二〇日まで実施された。
- 一、本調査は、横芝町教育委員会の主催によつて実施され、発掘作業は伊藤・海保が担当した。
- 一、本書の作成は、図版整理・写真撮影・原稿執筆など、すべて伊藤が担当した。
- 一、巻末に、文化財研究紀要として、栗山川流域の低地遺跡に関する報告文を収載した。
- 一、本書の収載図版の作製にあたつて、成東町史編纂室・横芝町文化財審議会より、機材の提供および技術指導を賜わつた。
- 一、本書の作成にあたつて、西山太郎・小高春雄氏から御協力を賜わつた。記して謝意を表する次第である。

目 次

発刊のことば	横芝町教育長 井上 武	三
例 言		五
I 調査経過		
一、調査に至る経緯		八
二、調査日誌抄		九
II 遺跡の位置と環境		一〇
一、遺跡地の景観		一〇
二、遺跡周辺の地学的環境		一〇
三、遺跡周辺の史学的環境		一一
III 遺跡の調査と保全対策		一三
一、遺構確認の発掘調査		一三
二、遺跡保全の現場指導		一四
IV 遺構・遺物		一五
一、確認遺構		一五
二、出土遺物		一六
V 遺物に関する考察		一七

挿図目次

第1図・荒久台遺跡の位置及び周辺地形圖

第2図・遺跡地形図	一
第3図・調査区域周辺地形測量図	二
第4図・遺跡保全指導実施区画	三
第5図・確認査定測図	四
第6図・土師器実測図（A）	五
第7図・土師器実測図（B）	六
第8図・須恵器・陶器実測図	七
第9図・鉄製品等実測図	八
第10図・荒久台遺跡出土遺物一覧表	九

図版目次

図版A・遺跡各景	一
図版B・調査区域の設定	二
図版C・調査区域全景	三
図版D・遺物出土状況	四
図版E・出土遺物（G—一）	五
図版F・出土遺物（G—二・G—三）	六
図版G・出土遺物（G—四）	七
図版H・保全指導区域出土遺物（1）	八
図版I・保全指導区域出土遺物（2）	九

（文化財研究紀要）

西總栗山川流域の土師式遺跡
一九十九里平野の後地遺跡に関する一考察

I 調査経過

一、調査に至る経緯

昭和五五年度の地域農整備事業の実施にあたって、土師器の散布地たる荒久台遺跡（長倉A遺跡）の現状変更が危惧されていたが、横芝町教育委員会では地元関係者・行政当局と協議の結果、下記の保全対策を講することとした。

當の確立を図ることにある。

整備事業の計画は、既存農道（幅員一・八・二・〇メートル）を拡幅舗装（幅員一・九メートル）して、併せて畠地全体（約七ヘクタール）に給水する灌漑施設を設置するものである。

（3）当該土木工事の実施場所

横芝町長倉字荒久台一〇一〇番地外

（4）当該土木工事の期間

開始：昭和五六年二月一〇日
終了：昭和五六年三月三〇日

1 整備事業の概要

- （1）事業名称および主体者
①農道整備事業／横芝町（町長・佐瀬哲司）
②畠地灌漑施設整備事業／長倉土地改良事業共同施行（代表
・長峰新）

2 関係遺跡の確認と対策

本地區は、山武郡横芝町長倉地先の下總台地と九十九里海岸平野との境界をなす地域で、関東ローム層に覆われた台地のため、農道および農地の流出や損壊が著しい。一方、農業用水は自然降雨に依存しているため、夏季に旱害を受けやすく、農作物の減収を余儀なくされている。本事業の目的は、既存道路を拡幅・舗装工事を実施して、道路の流出・損壊を防止、加えて畠地灌漑施設の設置によって、安定した農業経営を実現することになった。

昭和五五年四月上旬、事業主体者である長倉土地改良事業共同施行（代表・長峰新）より町教育委員会に對して、埋蔵文化財の有無についての問い合わせがあつたので、県文化課に照会して調査した結果、古墳時代の土師器散布地の所在が確認された。その後、遺跡の取り扱いについて県・町・地元の関係者による事前協議が再三催され、県文化課では現状保存の立場で行政指導を実施されたが、地元関係者の要望も強く、事業計画の一部を変更の上、遺跡保全のための管理者を置いて工事を実施することになった。

保全対策の方針と組織

町教育委員会では、町文化財審議会の伊藤一男委員に管理者を依頼、伊藤委員は関係の諸機関と協議して、下記の保全対策を実施した。

(1) 保全対策の方針

① 遺跡保全のために、関係者による対策協議会を組織して、各種の調査および現場指導を実施する。

② 事業の実施以前に、工事対象区域を含む遺跡全体の現状調査を実施、表面採取等の方法によって、関係遺物の検出に努める(予備調査)。

③ 工事の実施にあたっては、遺跡破壊を防止するために、現場関係者への指導の徹底を図る(現場指導の実施)。

④ 工事の際、⑤ 道路拡幅による遺物安置地の削平、⑥ 機場設置・配管工事等による開溝や部分的破壊、⑦ 大型機械の搬入・移動による表土層の擾乱など予想されるが、この場合は協議会の責任において試掘調査を実施して、遺構・遺物の有無を確認する(確認調査)。

(5) 工事の進行上、大幅な現状変更を余儀なくされる場合は、

工事の中止を指導し、関係者間で保全対策を協議、本格的調査についても検討する(調査団の編成)。

⑥ 工事終了後、各種調査および保全対策の経過・内容を関係者に報告し、その成果を公刊する(報告書の作成)。

(2) 対策協議会の組織

遺跡保全のための対策協議会は、下記の人々をもって構成するものとする。

調査長・井上 武(横芝町教育長)

調査員・土屋源吾(横芝町文化財審議会長)
同 同

長峰 新(長倉土地改良事業課長)
田中 静(横芝町役場産業課長)

調査主任・伊藤一男(武射史学会事務局長)
調査員・海保 孝(武射史学会)

事務担当・萩原次朗(横芝町役場産業課)
同 同

斎藤 博(横芝町教育委員会)
調査指導(二月二〇日～三月三〇日)

(3) 実施内容

① 遺構確認調査(一月二〇日～二〇日)

*

② 現場指導(二月二〇日～三月三〇日)

①の調査は、機場設置による遺構確認の発掘調査であり、調査は伊藤が担当し、海保が補助員として参加した。また②は、伊藤が中心となり現場指導にあたり、萩原・斎藤が涉外として参加した。

二、調査日誌抄

一月一〇日(晴) 午前中、遺跡全体の踏査。午後、調査対象地の測量開始。

一月一日(晴) 終日、測量作業継続。

一月二日(雲) 午前中、測量終了。午後、テント設営と器材搬入。

一月三日(晴) 午前中、対象地整備・グリッド設定。午後、
Gの表土剥き作業を開始。

一月一四日（晴） 一G・二G・三Gの表土剥ぎ作業。包含土器採取。

一月一五日（晴） 午前九時～一〇時、現地説明会（長倉青年館）。

午後、三G・四Gの表土剥ぎ作業。包含遺物採取。

一月一六日（雪後晴） 午前中、作業中止・遺物洗浄（中央公民館）。午後、県教育庁文化課の現場指導。二G北隅および三G東隅でローム地山を確認。

一月一七日（晴） 午前中、セクション・ベルト排土。調査区整備。

備。午後、一号住居カマド址を確認（一G）。

一月一八日（晴） 午前中、西山太郎氏（県文化財センター）の現場指導。午後、住居址プラン等を確認（推定四軒）。

一月一九日（晴） 遺構平面実測。写真撮影・周辺整理。

一月二〇日（晴） 確認調査終了。遺構保護のためグランド・シート敷設。

一月二一日（晴） 県教育庁文化課、現場指導。現状保存の方針決定。

二月一日（晴） 調査区の埋戻作業実施。

II 遺跡の位置と環境

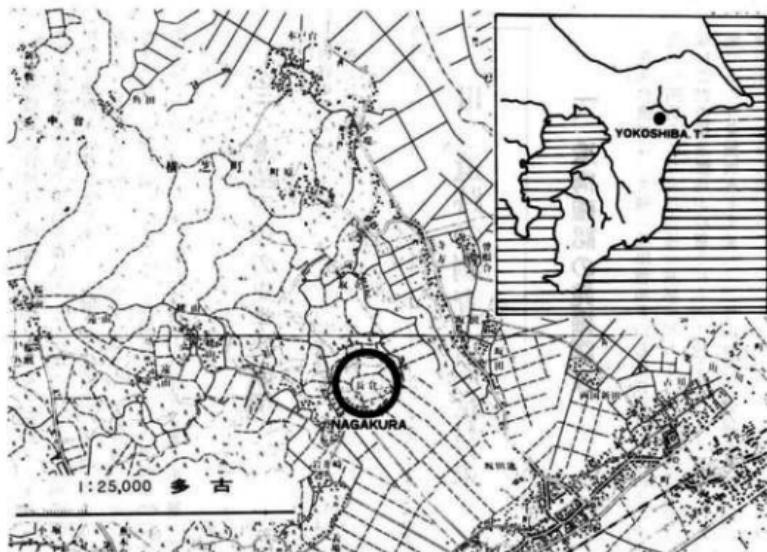
一、遺跡地の景観

荒久台遺跡（旧称・長倉A遺跡）は、国鉄總武本線横芝駅より西約二・五キロの地点にあって、千葉県山武郡横芝町長倉字荒久台一〇一〇番地外に所在する。本遺跡は、いわゆる古墳時代後期の土師器散布地で、栗山川と小河川によって浸蝕された樹枝状台地の一角であり、東側に湿泥な坂田溜池を望む台地上の平坦部に位置する。

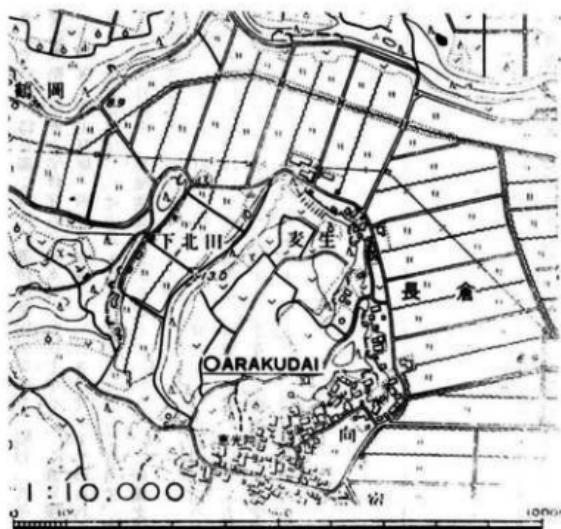
いる。遺跡台地には、平坦部の全体に土師器の極細片が散布しており、特に西側一帯が濃密で埋没住居群（村落址）の存在が想定される。また台地東南端には、長径約八メートルの円墳（長倉一号墳）があつて、本遺跡との関連性が推測される。

一方、山麓に連なる台地の傾斜面は、スギ・マツ・シイ・クス・カシ・クヌギ・クリなどが寄生しており、照葉樹を主体とする広葉樹・針葉樹の混交林である。その南斜面には縄文土器・土師器の散布が認められ、台地の北側と西側は中台・遠山方面に至る奥深い浸食谷が連なり、東側と南側の山麓からは肥沃な水田地帯が展開してゐる。

二、遺跡周辺の地学的環境



第1図 荒久台遺跡の位置及び周辺地形図



第2図 遺跡地形図

荒久台遺跡のある横芝町北部は、九十九里平野と下總台地との接点で、台地を刻む谷は両側の太平洋側からでなく、栗山川に合流する大きな谷が北東方向から樹枝状に入りこんでいる。栗山川は香取地方の山間部に発し、猪川・多古橋川・高谷川等の支流をあつめ両總国境を貫流して、九十九里浜に注いでいる。その流路は約三二キロで、上中流域では小支流が下總台地を樹枝状に開析し、その浸蝕谷群は広範囲な溪谷平野を形成している。

荒久台周辺の台地は、標高三〇メートルから四〇メートルであり、その台地面は平坦で畠地や森林として利用されている。地学的には、地形分類III A₂に属する関東ローム層の下総台地（東部下位ローム台地）で、起状量五〇メートル以下の半島状丘陵の一端であり、段丘面はゆるく北西に傾斜している。地質構造は、主に洪積世の成田層群（下部と、第三紀鮮新世の凝灰質頁岩と砂岩の互層（東金層）の交差する地域である。

三、遺跡周辺の史学的環境

遺跡周辺の台地上には、多數の古代遺跡が存在しており、それは縄文・古墳時代を中心として、中世遺跡も加えると約五〇件にも

及んでいる。特に縄文時代の遺跡は発掘例が多く、昭和二九年以降、鹿島義塾大学考古学研究室の清水潤三教授を中心に、牛熊貝塚・木戸貝塚・姥山貝塚・高谷川遺跡などの調査研究がすすめられた。中でも姥山貝塚は、「姥山式土器」の標準式遺跡として有名で、昭和三一年三月以来、発掘調査は五次を数え、姥山式など晩期縄文式土器の研究など多くの成果をあげている。

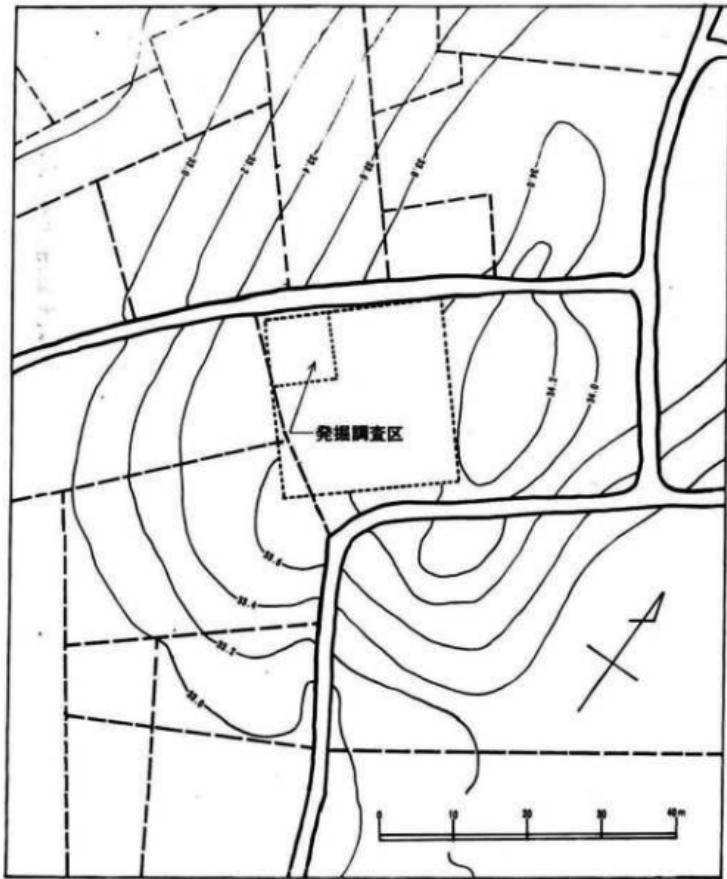
また、木戸台・町原・中台・寺方・取立など、武射國造期の古墳群も著名である。特に中台古墳群は、殿塚・姫塚を中心とし、前方後円墳二基、円墳一八基を数え、昭和三一年春、早稲田大学考古学研究室の滝口宏教授を中心とする発掘調査が実施され、後に国の史跡に指定されている。

III 遺跡の調査と保全対策

一、遺構確認の発掘調査

荒久台遺跡は、東側に坂出溜池を望む長倉地先の台地上にあり、複雑に開拓された舌状台地の基部にある。今回の調査対象地は、煙火灌漑の揚水機場が設置される約六四平方メートルで、工事の実施にあたり発掘調査を実施して、埋蔵遺構の確認と表土中の遺物を検出することとした。

調査の方法は、調査対象地を一辺四メートルのグリッドによつて、一G～四Gに区画、約四〇センチ幅の土層観察ベルトを残して深度五〇～七〇センチまで発掘し、埋蔵する遺構面を確認するとともに、表土層に包含される遺物の採取を実施した。調査において確認された遺構は、古墳時代後期の住居址四軒（推定）・カマド址一基（一号住）である。本遺跡の保存状況は比較的良好であり、検出遺物によって鬼高期を中心とする住居址であることが確認された。遺物の出土状況は、地表下二五～四〇センチ範囲が濃厚で、深度五〇セン



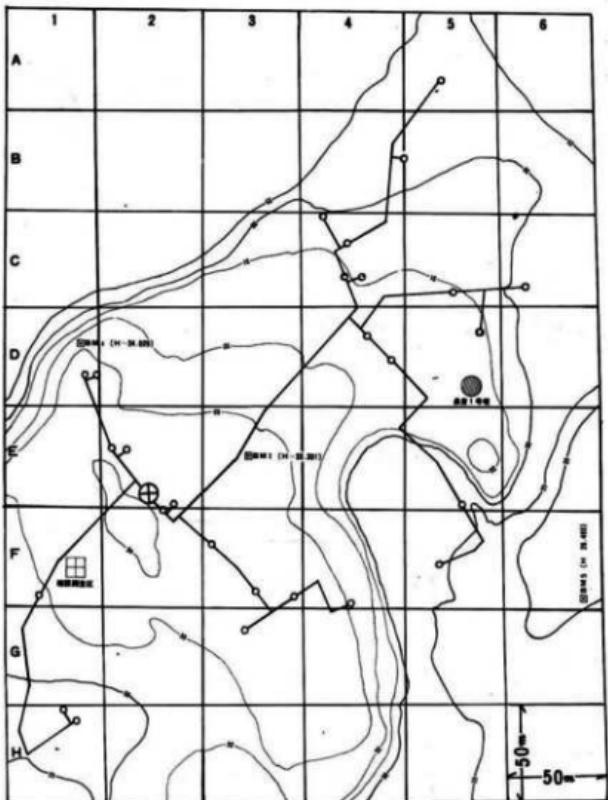
第3図 調査区域周辺地形測量図

予あたりに大型破片が埋没している。また、住居址四軒の遺構面は複雑に重層しており、長期間にわたって生活が営まれたことが窺知され、台地全体におよぶ村落の存在が想定される。

今回の調査は、あくまでも遺構確認のための発掘調査であり、遺構面（住居址覆土）を確認した時点で作業を中止、ローラー層の地山部分に井戸用ボーリング点を指示した後、現状保存のため遺構全体を川砂（約一〇センチ）で覆土してから埋め戻しを行なつた。

二、遺跡保全の現場指導

横芝町・長倉土地改良事業共同施行を主体者とする昭和五五年度地域農政整備事業は、①農道の拡幅・舗装工事、②畑地灌漑施設工事（機場設置・配水管理設）とともに、昭和五六年二月二〇日～三月三〇日を工事期間として実施された。この間、町教育委員会を主体とする対策協議会では、荒久台遺跡の保全対策をすすめ、保管管理者を依頼された町文化財審議会の伊藤委員は、事務担当の萩原・齊藤両氏の協力を得て工事関係者への現場指導を実施した。



第4図 遺跡保全指導実施区面

ます①農道の拡幅・舗装工事について、設計変更し、土盛工法の採用等によつて、拡幅部分の遺跡破壊を防止するに至つた。また、②畑地灌漑施設工事については、前記の遺構確認のための発掘調査を実施し、遺構の保存処理後、機場設置の工事を実施した。

一方、延長二一〇〇メートルに及ぶ配水管の埋設工事については、遺跡台地の全体に一辺五〇メートルの方眼状区画を設定し、各区画ごとに開溝作業の進行にあわせて、遺跡保全のための現場指導と出土遺物の採取を実施した。検出された遺物の多くは、土師器の極細片であり、器形不明のものがほとんどで文様の確認も不可能であった。参考までに、その一部を図版として収載した。

片（2G001）、同器台形土器片（2G002）が検出された。

第四号住居址 第四号住居址の覆土は三G南側より四G全体におよび、その範囲は六一〇センチ×四〇〇センチで、北東隅より土師質須恵器杯形片（3G001）、土師器變形胸部（3G005・3G006・3G007）、同底部（3G003）が一括出土土器し、付近にカマド址の存在が想定される。また、覆土中からは土師器變形口縁部（4G001・4G003）が検出された。

II、出土遺物

土器・器台形土器（第6図①） 第三号住居址北隅から検出された五領式土器の破片で、その遺存度は約十個体であり、上部を欠いており底径は五・五センチを測る。整形・焼成ともに良好で、内面はヨコナデ、外南にはクシ目が施され、胎土には少量の砂粒を含んでおり、色調は赤褐色を呈する。

土器・坏形土器（第6図②） 第一号住居址のカマド直上より出土した鬼高式土器で、その遺存度は約十個体であり、口徑一三・八センチ、器高四・三センチを測る。丸味をおびた平底の底部より緩やかに立ちあがり、口縁部はやや外反している。器表面の整形は、外に立ちはだかり、口縁部はやや外反している。器表面の調整は、外に立ちはだかり、口縁部はやや外反している。

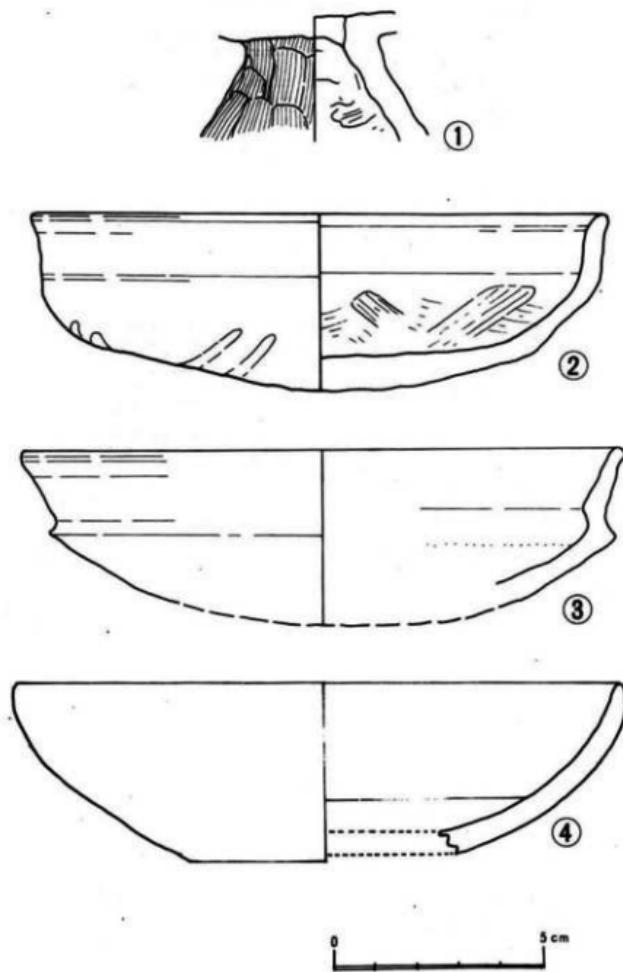
土器・壺形土器（第6図③） 第二号住居址のカマド直上から検出された壺形土器の破片三個体で、その復元法量は口徑一四・五センチ、器高四・〇センチ程度と推定される。器形は鬼高期の特徴よく示しており、鋭く突き出た稜をもち、口縁部はやや外反している。器内は非常に薄く、内面はヨコナデ、外面口縁部はヨコナデであり、体部はヘリケズリ後ヨコナデが施されている。胎土にはやや砂粒を含み、焼成は良好で、赤彩によって色調は赤色（一部赤褐色）を呈する。

土器・壺形土器（第6図④） 第三号住居址の覆土表層より出土した丹塗土器で、その遺存度は約十個体であり、復元法量は口徑一四・五センチ、器高四・〇センチ、底径六・二センチ程度と推定される。平底の底部より緩やかに立ちあがり、口縁部はやや内凹して、体部には強く横方向のヘリケズリが施されており、特に底部外縁には細かいヘリケズリが認められ、口縁部・内面とともにヨコナデが加えられている。胎土は少量の砂粒を含み、焼成は良好で、丹塗以外の色調は灰褐色を呈し、外面の一部にカーボンが付着している。

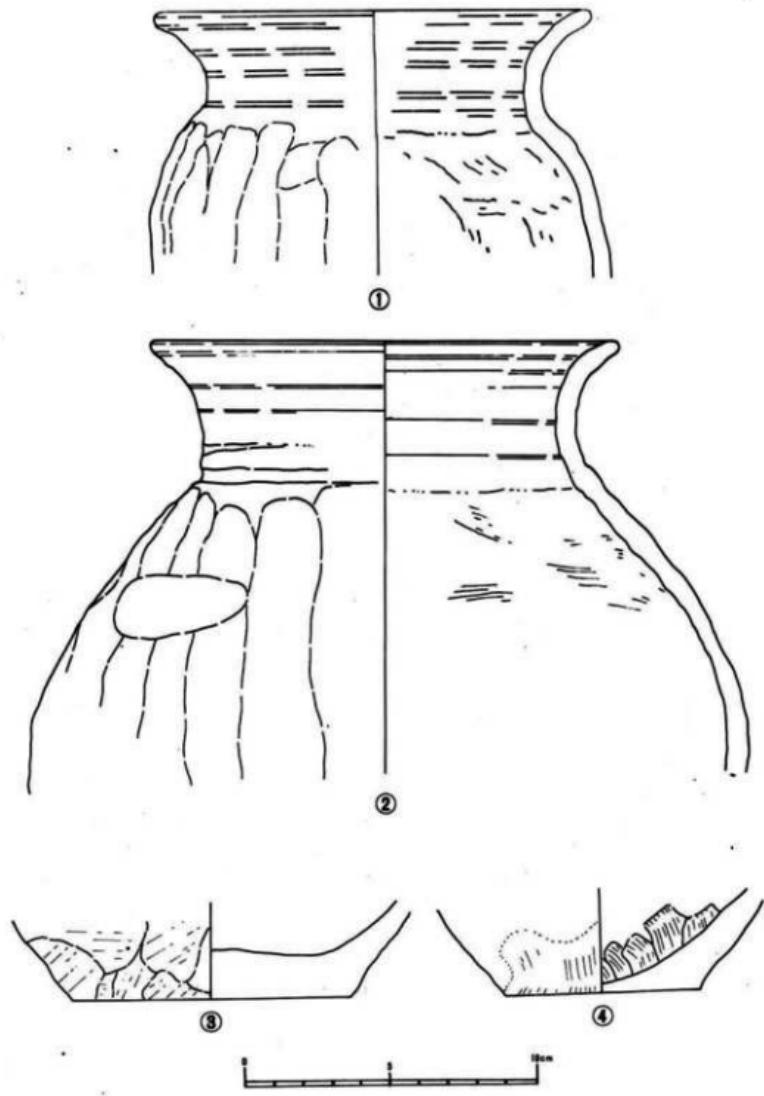
土器・壺形土器（第7図①） 第四号住居址東隅出土の鬼高式土器で、その遺存度は口縁・胴部の約十個体であり、比較的小型の壺形土器で、口径は約一五センチと推定される。器表面の調整は、外面口縁部にはヨコナデがみられ、胴部には縦方向のヘリケズリが施されており、内面は胴部・口縁部とともにヨコナデが加えられている。胎土・焼成ともに良好であり、胎土中に砂粒を含み、器肌は比較的かたく、色調は褐色を呈する。

土器・壺形土器（第7図②） 第四号住居址東隅出土の鬼高式土器で、その遺存度は口縁部十個体であり、口径は一六・一〇センチを測る。整形は内面・外面口縁部とともにヨコナデで、外面胴部にはヘリケズリが施されている。胎土は砂粒を含み、焼成はやや良好で、色調は赤褐色を呈する。

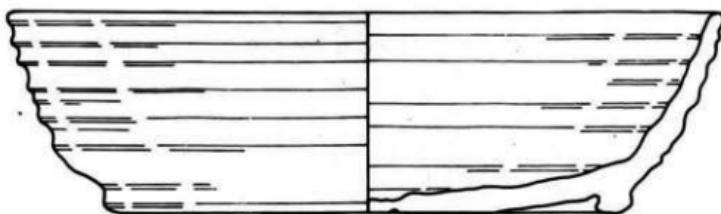
土器・壺形土器（第7図③） 第四号住居址東隅出土の底部完形（四片接合）で、その底径は九・六センチを測る。器肌の調整は、



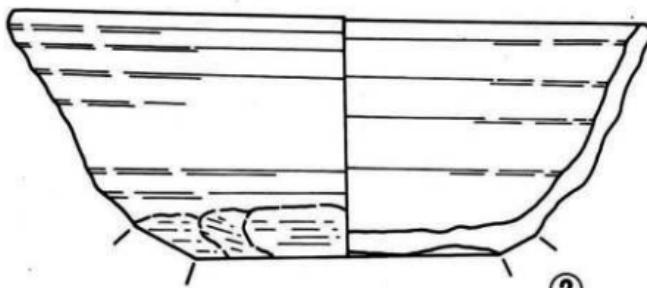
第6図 土器実測図（A）



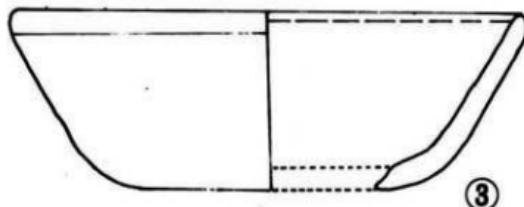
第7図 土師器実測図 (B)



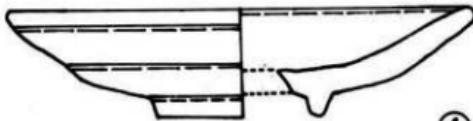
①



②



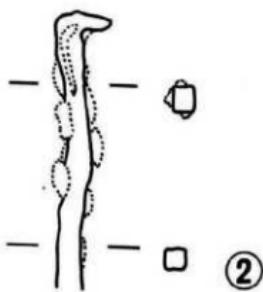
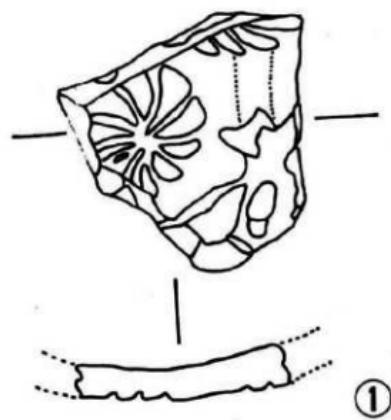
③



④



第8図 須恵器・陶器実測図



第9図 鉄製品等実測図

外面・底面とともにヘラケズリで、内面はヨコナデが施されている。

胎土は砂粒を含み、色調は赤褐色（一部黒褐色）を呈する。

土器・坏形土器（第7図④）

第一号住居址のカマド付近より出土した坏形土器で、その遺存度は底部す個体であり、底径は六・七センチを測る。器肌の調整は、内面はヨコナデとヘラナデが加えられ、外面はヨコナデが施されているが大部分が剥落しており、底面はヘラケズリで仕上げている。胎土は砂粒を含み、焼成はやや不良で、色調は赤褐色を呈している。

須恵・高台付坏（第8図①）

第一号住居址出土の真間期須恵器で、その遺存度は約十個体弱であり、復元法量は口徑一五・三〇センチ、底径一・二〇センチ、器高四・三〇センチを測る。高台付の底部から緩やかに立ちあがり、口縁部はやや外反して、調整は内外ともロクロナデであるが、底部の切離しは不明である。胎土は若干軟質で、色調は灰色（一部灰褐色）を呈する。

須恵・坏形土器（第8図②）

第四号住居址東隅から検出された国分期の土師質須恵器で、その遺存度は約十個体（九片接合）であり、口徑一三・六センチ、底径六・五センチ、器高五・三センチを測る。器形は体部の中位でやや膨らみ、内壁しながら口縁部にのびるもので、体部の調整は内・外ともにロクロナデであり、体部下端に手持ちヘラケズリが加えられている。また、底部の切離しは静止糸切りであるが、底面は完全な円形ではなく、ロクロ作業に未熟さが残る。焼成はやや不良で、胎土は砂粒を含み、色調は黒褐色を呈する。

須恵・坏形土器（第8図③）

第一号住居址の覆土中から検出された須恵器片で、その遺存度は約十個体であり、復元法量は口徑一・〇センチ、底径六・七センチ、器高三・七センチを測る。ロク

ロ仕上げで、胎土・焼成とも良好であり、色調は灰褐色を呈する。

陶器・高台付皿形片（第8図④）

第一号住居址の覆土中より出土した灰陶陶器で、その遺存度は約十個体で、復元口徑は約一〇センチ程度と推定される。胎土・焼成とも良好で、色調は灰白色を呈する。

須恵・鉢形土器（第9図①）

第一号住居址覆土から検出された土師質須恵器の極細片で、体形胴部と考えられるが器形の復元是不可能である。外面には「菊華流紋」に類似した押型が認められ、

胎土・焼成とも良好であり、色調は灰褐色を呈する。

鐵製品・釘（第9図②）

第一号住居址のカマド付近から検出された現存部五・一〇センチの鐵釘で、その断面法量は三一四ミリ角であり、遺存状態は比較的良好である。

〈その他の遺物〉

土器器 調査区の表土中には土師器・須恵器・陶器の破片が多量に含まれておらず、約二五〇片程度を採取したが鬼高器の土師器が主に占めるが、いずれも極細片のため器形の復元は困難である。

須恵器 住居址の覆土表層からは、須恵器の細片が検出され、坏形（青灰色）・坏蓋（灰褐色）・高台付皿形底部（青灰色）などが認められた。

陶器・瓦 そのほか表土・覆土中からは、灰釉・綠釉・鐵釉・常滑などの陶片多数、厚さ約一・〇センチの瓦片（女瓦）が検出された。

V 遺物に関する考察

荒久台遺跡とは、千葉県横芝町長倉地先の台地上に所在する土師器の散布地で、調査主任が字名をとり遺跡名称としたものである。今回、昭和五年度の地域農政整備事業に先駆けて、遺構確認のための発掘調査を実施した。その対象地域は、畑地灌漑用の揚水機場と給水パイプ埋設の計画路線内であり、しかも遺構面（住居址の覆土表層）を確認した時点で発掘作業を中止したため、住居址（ラン全体の把握は不可能であった。しかし、住居址（推定四軒）の覆土面は複雑に重層しており、長期間にわたって生活が営まれたことが窺知される。発掘調査の結果、遺跡台地には古墳時代後期（鬼高一期）・奈良時代（真間期）・平安時代（国分期）の埋没住居群（集落）の存在が明確になってきた。そこで、これらの古代集落が、当地方の歴史的環境の中において、周辺の遺跡とのような関係があったかを、現在までに調査・研究されている考古学的資料に基づいて推察を行つてみたい。

まず第一点は、荒久台遺跡における遺物の總括的把握であるが、出土した遺物は土器と鉄製品であった（第10図参照）。土器は、鬼高一期を主体とする土師器と、真間・国分期の須恵器であり、鉄製品は鉄釘である。出土遺物の時期は、古墳時代初頭（四世紀）に始まり奈良・平安時代にわたるが、主体をなす遺物は古墳時代後期以降のものである。遺物の多くは、普通の集落遺跡で認められる日常生活の雑器であり、土器の形態もオーソドックスである。最近、九十九

(第10図) 荒久台遺跡出土遺物一覧表

時 期	種 別	器 形	法 量			住居址	備 考
			口徑	器高	底径		
五 領 期	H	器 台 形			55	3	約1個体
鬼 高 期	H	坏 形	138	43		1	約1個体
"	H	坏 形	145	40		1	カマド址・赤彩土器
"	H	坏 形	145	40	62	3	約1個体・丹塗土器
"	H	壺 形	150			4	約1個体
"	H	甕 形	161			4	口縁部1個体
"	H	甕 形			96	4	底部完形
"	H	甕 形			67	1	カマド址・底部1個体
真 間 期	S	高 台 付 杯	153	43	112	2	約1個体
国 分 期	S	坏 形	136	53	65	4	約1個体・土師質須恵器
"	S	坏 形	110	37	67	1	約1個体
不 明	T	高台付皿形	110			1	約1個体・灰釉陶器

〈註〉①種別はH（土師器）・S（須恵器）・T（陶器）で示した。

②法量の単位はcmで示した。

里地方でも大規模な調査例が増加しているが、本遺跡も上記遺物に加えて周辺の散布状況・立地条件等からみて、一〇〇軒を単位とする集落遺跡の存在が想定される。また、出土点数は少量であるが、当地方における須恵器のあり方はひとつの地域性を示している。

つぎに、鬼高窯を主体とする土師器の問題であるが、本遺跡の遺物保存状況は比較的良好であり、埋藏深度は表土下二五〇四〇センチ範囲が濃厚で、さらに表土下五〇センチ付近から予個体程度の大形破片が検出される。いわゆる土師器とは、古墳時代以降、奈良・平安時代まで続いて製作使用された素焼の土器であるが、弥生式土器から直接続くもので、各地域ごとに土器型式による編年が確立されつつある。たとえば南関東では、五領・和泉・鬼高・国分の各型の各型式に編年され、それぞれ細分されている。普通、その色調は黄褐色で、粘土（陶土）を水にとかして、その粘土質の精粗を分けた陶土が用いられ、焼成温度は弥生式土器と大差なく八五〇度前後である。技法的には、輪組みや巻上法による成形が行なわれたが、のちには高度なロクロも使用された。しかし、須恵器の製作に使われたような大規模な窯は現れない。古墳時代中期には須恵器の製作が始まるが、日用品としての土師器などは普及しなかった。土師器には壺・高环・壺・甕・瓶・鉢・器台などの器形があり、文様はほとんど認められない。

発掘調査の結果では、古墳時代前期（五領期）の遺物が最初のものであるが、この時期の土器には約十個体の器台形土器（三号住跡）には鬼高窯住居跡群が當まると考観される。出土遺物は、土師器の壺形土器を中心とし、壺形土器・甕形土器（口縁部・胴部・底部）の大型破片が検出され、いわゆる赤

彩土器が含まれている。ここでは、第一号住居跡のカマド付近から検出された壺形赤彩土器・壺形丹塗土器（約十個体）に注目し、ある程度の技術的問題について考えてみたい。先の遺物の記述で、「赤彩」および「丹塗」と注記したが、赤彩は土器焼成以前に赤色顔料を化粧土に混入して器面に塗彩したものであり、予め器面の色調効果を狙った意図的な製作であると考えられる。カマド址の直上から検出された壺形破片（三個体）に認められる手法である。土器は荒成形の後、ヘラケズリを主として再調整が施されるが、この工程において化粧土が塗られるものと推測され、この手法は五領式及び鬼高式との間連で捉えられる。つぎに丹塗であるが、これは土器焼成後に塗彩されたもので、赤色顔料には鉛丹・ベニガラ・赤土などが用いられ、カマド址から検出された壺形土器に認められる。赤色顔料は、一般的に赤丹・鉛丹とよばれる四三酸化鉛が多く用いられ、鉛に硫黄・硝石を加えて焼いて製した。また、まれではあるが丹砂とよばれる鉱物顔料も用いられ、自然界に存在する硫黄・水銀の化合した赤土である。

この鬼高窯の時代には、当地方には規模の小さい群集墳が濃厚に営まれる状況を示し、当時の東国農民と在地豪族の一裏面を現わす貴重なデーターが中古古墳群の殿塚・姫塚から出土した葬送埴輪列の中に現知される。川戸彰氏の研究によれば、九五〇基を越える山武郡の現存古墳のうち八〇%近くが郡北台地に集中しているといわれ、中でも芝山古墳群は最大のものとされる。その支群を形成する横芝地方の古墳群としては、中古（前方後円墳一・円墳一八）、木戸台・町原（前方後円墳一・円墳一）、寺方（前方後円墳三・円墳二三）の三群である。このうち寺方古墳群は、梅林造成のために大規模な破壊を受けて、横芝町の北部台地には、現在、前方後円

墳四・円墳三四・経塚三など、总数四三基が保存されている。また、古墳群の周辺には、古墳を築造した人々の集落が営まれたと考えられるが、横芝町における土器の散布地は次の如くである。

- ①長倉A・B（荒久台）→台地斜面（南側）・台地上平担部→山林・畑地。
- ②木戸台A・B（上宮台）→台地斜面（北側）・台地上平担部→山林・畑地。
- ③木戸台C（下宮台）→台地斜面→山林
- ④遠山A（遠山）→舌状台地上→畑地（歴史時代）
- ⑤遠山B（桜前）→台地上→畑地
- ⑥坂塚・姫塚（中台）→台地平坦部→山林
- ⑦寺方三号墳（坂田城山）→台地平台部→梅林（埴輪・土師片多量）

平安初期（九世紀初頭）の撰録といわれる「先代旧事本紀」第一〇巻の「国造本紀」によれば、「武社国造・志賀高穴穗朝、和邇臣祖、彦意邪都命孫、彦忍人命定國造」とある。この記述によれば、武社国は和邇系氏族の勢力圏と考えられ、「古事記」の孝昭天皇の条の和邇大系譜中には、六氏のひとつである车邪臣の故地と指摘されることがある。古代、成務天皇の世に彦忍人命が武社国造に任命され、木戸川、栗山川の流域地方を支配地として、和邇一族である车邪臣が活躍したものと推定され、芝山町の宮門神社は和邇神（彦忍人命）を祭神としている。また、角川源義氏の研究によれば、和邇氏族は入江のある水系を掌握してたつといわれ、九十九里最大の規模をもつ栗山川渓谷の入江が武社国造（车邪臣）とその部民たちの生活拠点となつた可能性は大きいと

いえる。芝山古墳群が武社国の中央部を形成していたと推定され、姫塚・姫塚古墳の被葬者は、やはり武社国造の系譜に連なる古代村落の族長層であつたものと考えられる。

また、真間・国分期の須恵器であるが、遺物は第二号住居址から検出された高台村坏形土器（真間）の約十個体と、第一号住居址、第四号住居址から検出された坏形土器（国分）である。特に、第四号住居址の遺物は、いわゆる土師質須恵器とよばれるもので、約十個体の遺存状態ではほぼ完形を呈している。また第一号住居址からは、約十個体の灰釉が施された高台付皿形陶器が出土、時期は不明であるが遺跡覆土中から板細片が検出されるので住居址との関連で捉えられる。横芝町における須恵器の出土例は少なく、木戸台遺跡の第一号土壤中から検出された長頸壺・広口壺の二点をあげるのみで、ともに国分期の遺物で長頸壺には「（山辺）庄刀部」の陰刻銘が認められる。荒久台遺跡から検出された遺物と併せて、地方窯から産出された須恵器であるものと考えられる。

ところで、いわゆる須恵器とは、祝部式土器・朝鮮土器とともに、古墳時代の後半から平安時代にかけて盛行した陶質土器である。ロクロを使用して成形、窯窓で一〇〇〇度以上の還元炎で焼成した。色調は灰褐色または灰黒色を呈し、たとくと、金属音に近い音を発する。器種には、壺・高壺・壇・甕・甕・器台などがある。朝鮮の新羅焼の系統を受けたもので、古墳時代中期より知られ、その末期には古墳の副葬品の中に多数見いだされる。それらはやがて日本化し、奈良・平安時代まで続いたが、その技術はやがて瀬戸焼・常滑焼・備前焼など、地方色豊かな中世窯業の母胎となつたのである。

真間・国分期の須恵器が用いられた荒久台遺跡の周辺は、奈良・平安時代の上越國武射郡長倉郷に編入され、長倉郷の主要部を形成

していたものと考えられる。承平五年（九三五）の撰録と伝えられる「和名抄」によれば、律令期の上総国武射郡には、巨備・加茂・理倉・押狹・長倉・時代・片野・大蔵・新居・新星・地星の諸郷が置かれていた。古代武射郡の範囲は、栗山川以南から木戸川流域にかけての地域で、かつての武社国造の統治圏を基礎としたものと考えられる。横芝地方に関係あるものでは、長倉郷以下、理倉（曾根合）・押狹（牛熊）・時代（横芝・栗山）の諸郷である（村岡良弼『日本地理志料』・吉田東伍『大日本地名辞書』）。このうち時代郷に関する史料が『正倉院文書』に散見される（竹内理三編『寧樂道文史卷』〈宗教編下・造寺所公文〉東京堂・一九六五）。

貢上 経師

矢作廣鳴、上総国武射郡畔代郷主矢作廣麻呂戸口。

神護景雲四年六月十四日
大僧都法進

八世紀当時、仏教の盛行につられて大量の僧尼が必要とした。民間から僧尼に耐える者の貢挙が要請され、反面、貢挙せられた者は、仏に結縁せんことを願う信者という意味で「知識優婆塞」とよばれた。前記の『正倉院文書』は、この優婆塞貢進に関するもので、矢作廣鳴は畔代郷出身の経師として注目される。

一方、古代末期・律令体制が崩れて東国各地に反乱が起つたが、中でも平将門の乱（九三五・九四〇）は京都貴族に重大な警告を与えた。将門の伯父にあたる上総介平良兼は、国司として上総一円に勢力をもつていたが、承平六年（九三六）両總の兵をひきいて、下野の国境で將門軍と戦っている。『將門記』（真福寺本）による

と、「不就所々聞、自上総国武射郡之少道、到着於下総国香取郡之神前」して常陸國へ入ったといわれる。この良兼の居城地については明確でないが、村岡良弼・清宮秀堅などの説によれば、上総国武射郡屋形村（横芝町屋形）の地に比定される。清宮は「屋形蓋上総介平良兼所館。亦換郡司故資也。天慶乱、良兼取間道、自武射小路、至神前津。舟入常陸、與国香食。」との研究成果を発表しており、また村岡もその著書「日本地理志料」第一八巻（上総国）の中では清宮説を紹介している。

以上、荒久台遺跡から出土した資料に関する検討を中心に、その背景となつた歴史的環境について考察してきた。今回の発掘調査は、遺跡台地の一部分を試掘しての確認調査にすぎなかつたことを言明し、当地域の歴史的解説は、今後の調査・研究の深化に期待しなければならないことを付記する。

最後に、現地長倉の発掘調査では、地元関係者多数のご理解・ご協力のもとに、発掘操作業を円滑にすすめることができました。ここにご助力賜わりました方々のご芳名を誌し、厚く御礼を申し上げる。次第であります。

長峰 新 長峰義雄 柳橋 保 柳橋珠宙
吉川 儀 伊藤博夫 伊藤剛光 吉川義男
押尾隆郎 柳橋菊江 伊藤亮子 伊藤英代
(順不同・敬称略)



遺跡周辺航空写真



遺跡台地遠景（南側より）



遺跡遠望（台地東端より）

図版 A・遺跡各景



長倉1号墳（台地東南端）

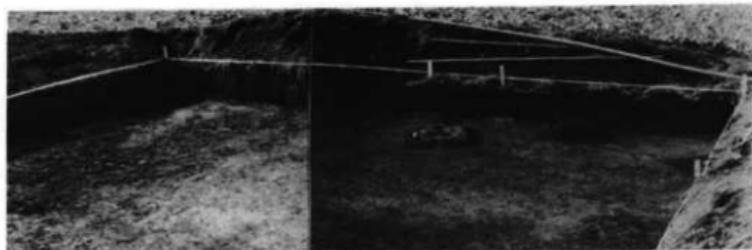


調査区域（8m×8m）

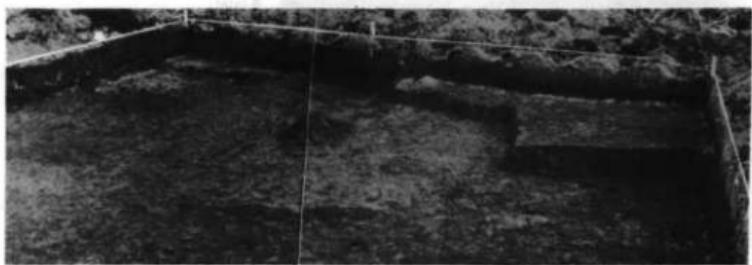


表土削ぎ作業（G-1）

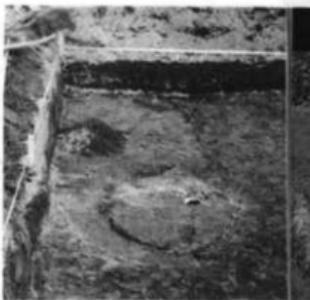
図版B・調査区域の設定



G-1・G-4 (北側より)



G-2・G-3 (南側より)



カマド址 (1号住)



埋戻作業完了

図版C・調査区域全景



3 G001

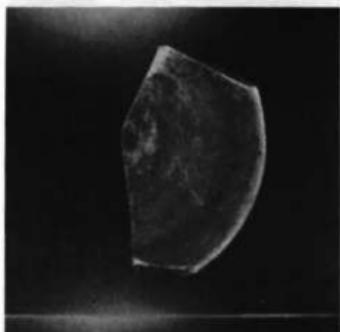


K M001
K M002
K M003



1 G001

図版D・遺物出土状況



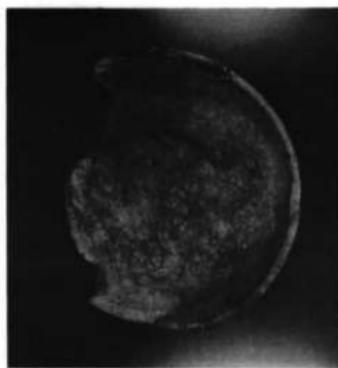
1 G001



1 G002



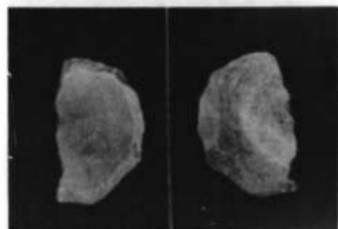
1 G003



K M001

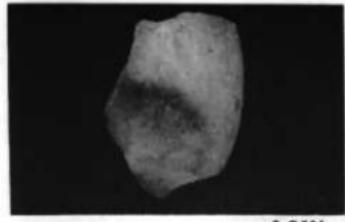


K M002

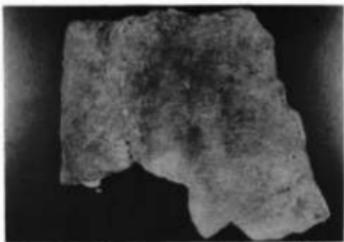


K M003

図版E・出土遺物 (G-1)



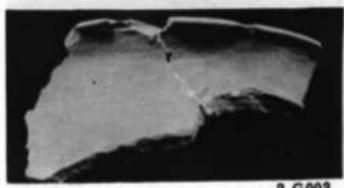
2 G001



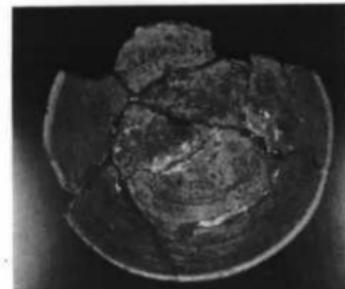
3 G002



2 G003



3 G003

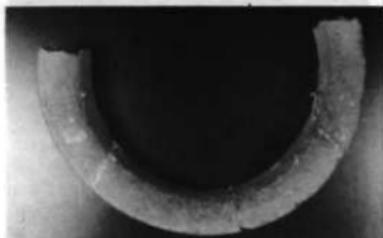


3 G001



3 G004

図版F・出土遺物 (G-2・G-3)



4 G 001



4 G H 001



4 G 003

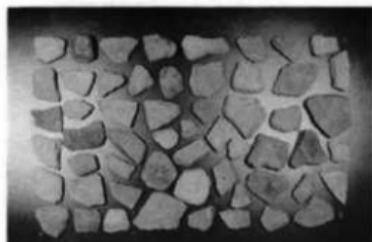


4 G 004



4 G 005

図版G・出土遺物 (G-4)

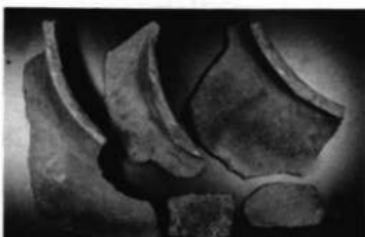
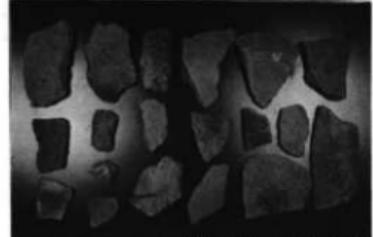
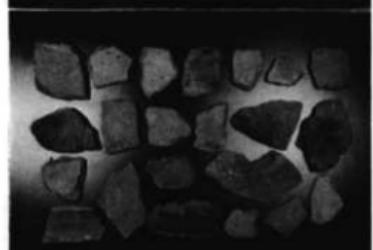
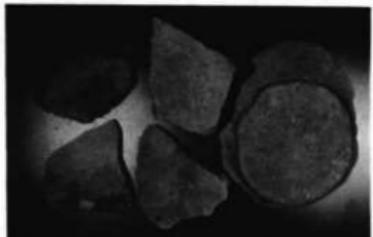


F2・E2・E3・D4



C4・C5・B4・A5

図版H・保全指導区域出土遺物(1)



F1 · G1 · F3 · F4

D5 · E5 · F5 · G3

图版 I · 保全指導区域出土遺物(2)

両總栗山川流域の土師式遺跡

—九十九里平野の低地遺跡に関する一考察

I

横芝町では、昭和四十五年以降、木戸台・小堤・中台・長倉など、開発破壊による遺跡の緊急調査が相つぎ、文化財行政は急速な展開をみせた。この間、常に筆者の念頭にあつたものは、平野部における低地遺跡の問題であった。いわゆる埋蔵文化財の保護は、現状では台地上の遺跡に限定され、低地遺跡については対象外に置かれていた。

九十九里平野における低地遺跡の研究は、慶應義塾大学の清水潤三教授によって着手され、最近では古内茂・西山太郎両氏の業績をあげることができる。また、長倉遺跡の調査で御指導を賜った立正大学OBの小高春雄氏は、九十九里平野のほぼ全域を踏査、すでに詳細な遺跡分布図を作成されておられるが、栗山川流域では横芝町上町遺跡・本町遺跡・栗山宮脇遺跡・光町桑郷遺跡・木戸遺跡など、土師器の散布地を確認された。一方、筆者もすでに数年前、横芝町星形字入間地先において土器片の散布を確認、土師器と考えられる素焼土器の破片などを検出して、郷土地方における低地遺跡の存在をある程度予察していた。

從来、九十九里平野の開拓は、中世末期に始まり江戸中期から本格化したとする説が一般であった。しかし、低湿地から検出される

遺物の中には、完形ないしは完形に近いものが数多くあるので、單に土器が流入したと考えることはできない。現在、畠地や山林に変貌している平野の微高地は、原始・古代には砂丘であつて、人々が生活していたものと考えられる。また、砂丘ばかりでなく、低湿地でもある時期、ある場所においては人々が生活できる状態にあつたといえる。小高氏の調査結果では、當時砂丘であつたと考えられる畠地・山林には、土器の形状を推定できるものから、まったく磨耗してしまった極細片まで、広汎な散布が確認され、臨時のキャンプ地ではなく郷単位の村落が想定される程であるといわれる。この地域での遺跡確認作業は、原始・古代における海岸平野の地形条件や土地利用・交通順路などを復元する上から大切であり、文献資料の乏しい九十九里古代史解明への重要なヒントを提示してくれる可能性を秘めている。

長倉遺跡の調査後、小高氏から低地遺跡の占地形態について御指導を頂き、谷津川流域（現在の東部一〇号幹線水路）の河畔砂丘上に位置する蓮沼村川面地先の散布地など、新たな遺跡の確認に努力している。これはあくまでも予察にすぎないが、九十九里平野における低地遺跡は水系単位に地域毎に集中的な分布を示すものと考えられ、太平洋に注ぐ河川沿岸を詳細に点検すれば、数多くの遺跡が発見される可能性がある。この点、土師式遺跡については、本文中に述べたとすると、その可能性がある。この点、土師式遺跡については、本文中に述べたとすると、その可能性がある。

では栗山川流域の土師式遺跡に限定して、(1)九十九里平野の形成と低地遺跡、(2)栗山川・木戸川流域の土師式遺跡、(3)横芝町入間遺跡の表探遺物について検討を試みたい。

II

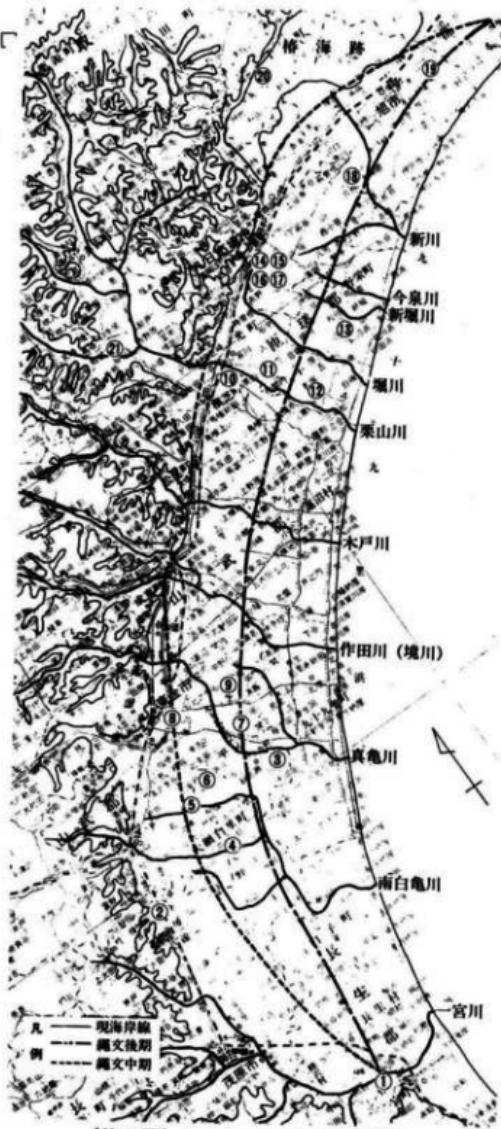
千葉県の東部、太平洋に面して九十九里平野がある。外洋に接する海岸線は非常に長く、北の刑部岬から南の太東岬まで約六〇キロに及び、両總台地との接点は急崖をなし地形的には明瞭である。この九十九里平野は、過去一〇〇年間に約二〇〇メートルも海岸線が陸化する「隆起式海岸」であるが、平野を南北に走り両端に集中する九列の低い砂丘と、その中間の低湿地から成る。この砂丘の砂は、飯岡や太東岬の海蝕崖から供給され、海流に運ばれて海底に砂堆（沿砂洲）がつくれられ、これが海底の陸化によって陸化すれば砂丘となる。これらの砂丘の幅に大小があるのは、砂の供給力の変化によるものであり、砂丘列間の湿地帯の幅に広狭があるのは、浜底の隆起量の大小に關係があるものと考えられる。海岸平野の總面積は約七〇〇平方キロにおよび、このうち砂丘列の面積は六〇%を占め、畠地二%・平地林三%・宅地その他九%といった利用状況である。平野の四〇%は低湿地で、水田・沼沢・湿地その他となっている。

この海岸平野の成因については学説が多いが、一般的には「海底がしづかに隆起し、そこへ潮流によつて砂が運ばれてつむり、しだいに陸地化して砂丘となり、砂丘地帯の後方には、湿地や沼沢、草原などが散在している」との隆起説が主流を占める。しかし、一方では「繩文時代前期のころ、いわゆる海退現象がはじまり、陸は海

に向つて前進した。背後に大小の浅い沼を残しながら、陸は前進を続けた」とする海退説も提示されている。いずれにしても、沖積世に入つてから次第に形成され、ついに今日の海岸線に達するまでに発達したことは疑う余地がない。

この弓形状に展開する海岸平野は、その人文地理学的变化で興味の多い地域であるが、繩文中期以降、原始・古代の人々の生活もこの地理に影響され变化をみせている。この海岸の遺跡に注目され、長期間にわたり調査・研究を続けられた清水潤三教授は、「九十九里沿岸に於ける低地遺跡の研究」と題する論文の中で、次のように述べている。

「海岸平野の中央に位置する上貢塚、上谷、南飯塚、庄瀬等の諸遺跡がいかなる性質を有するものかに我々の注意が注がれたのである。即ちこれらの遺跡はおのおの当時の海岸線に接し、陸化後間もない時期に当り、直接風浪におそわれる危険に曝されていたに相違ないからである。我々は南飯塚においては通鑑な包含層を見出しえず、庄瀬の遺跡は河川改修工事によって切り崩され、その痕跡を止むるにすぎないために、上貢塚、上谷の二遺跡を発掘調査したに止まるが、その結果は両者共に極めて類似した様相を示し定住的な生活の行われたことを疑わしむるに至つたのである。即ち表土下一メートル弱に、ある時期における海岸線の存在を示すと認められる自然貝層が存し、その直上に貝殻を混じえた土器の包含層が乗つてゐる事実は、海上に生じた砂堆が陸化して砂洲状を呈した直後に繩文文化人の足跡を見たことを示すものと思われ、加うるに遺物も散在する少量の土器片に限られている。かように地理的には不安定な場所で遺物も僅少である事実は定住的な生活が行なわれたことを否



(第1図) 九十九里平野の低地遺跡

定するに十分であり、恐らくは漁撈に従事する目的で季節的に往来する場所であったかと想定される。(中略) 背後の下総台地縁辺には縄文土器を出す富な遺跡が点在しているから、彼らの主要な集落はやはり他の地方と同様に台地およびその周辺渓谷に臨む地帯に止まっていたものと考えられる。清水教授が確認された低地遺跡は第I表(次頁)のごとくであるが、南部の一宮貝塚(貝殻塚)は低地・台脚・台中復におよんで遺物が包含されているが、広大な海岸平野に散在する遺跡はいずれも

規模が小さく、一般的の遺跡と性格の異なる様を示している。この海岸平野の遺跡には縄文早期・前期の遺物はない。中期の遺跡が橋神社境内(2)と上貞坂(5)であり、後期の遺跡は一宮貝塚(1)が塙之内式で古く、北へいくて上谷(6)・広瀬(7)は加曾利B・安行面式土器を主体とする。これらの遺跡について詳細に検討された結果、清水教授は①縄文中期の海岸線は今日の標高八メートル以下に進出していないこと、②縄文後期の汀線は概ね標高五メートル付近に求めることが可能であると推論された。

(第1表) 九十九里平野の低地遺跡

No.	所 在 地	種 別	遺 物	備 考
1	長生郡一宮町貝塚	貝塚?	縄文	縄文後期
2	本納町橘神社境内	散布地	縄文	縄文中期
3	山武郡白里町四天木沼	*	土師	
4	* 増穂村南郷貝塚	貝塚?	縄文・土師	
5	* 上貝塚	貝塚?	縄文	縄文中・後期
6	福岡村上谷中ノ台	貝塚?	縄文	縄文後期
7	正気村広瀬三ツ塚	貝塚	縄文	縄文後期
8	東金町堀上油免	貝塚	土師	
9	正気村家徳	包含地	独木舟	
10	横芝駅東方	*	独木舟・土師	
11	匝瑳郡東陽村宮内	*	独木舟	
12	白浜村木戸	散布地	土師	
13	栄村稻田開端	*	土師	
14	八日市場町旧新田残沼	包含地	独木舟・櫻	
15	* 大塊18	*	独木舟	
16	* 大塊26	*	独木舟・櫻	
17	* 旧新田	*	縄文・独木舟	
18	豊畠村大塚原	散布地	土師	
19	海上郡矢指村(旧足川村)	包含地	有角石器	
20	香取郡古城村万力	*	独木舟・縄文	
21	山武郡大船村高谷川	*	独木舟	縄文後期

(注1) 本表は清水潤三氏の論文(1954)によって作成した。

(注2) 遺跡の所在地は旧地名のままとした。

III

九十九里平野のはば中央を流下する栗山川は、その上流部において両總台地を複雑に開析し、奥深い渓谷平野を創出している。縄文早期以降、この渓谷には海水が進入しており、樹枝状台地の縁辺部には大小数多くの貝塚が形成されていた。やがて、稻作農耕を主体とする弥生文化の円熟を経て、豪族的支配関係を基盤とする古墳時代の展開を見るが、栗山川流域の台地上の要所には武社古墳群の古墳と遺物散布地が群集している。九十九里平野の開拓は、この時期から開始されたものらしく、両總各地の河畔砂丘上には内裏塚古墳、尾垂古墳や土師器の散布地など、数多くの低地遺跡が点在している。

(第2表参照) 次頁) この古墳時代以降の土師式遺跡は、両總台地直下の砂丘列に始まり海岸部の砂丘丘上まで、平野部の微高地とくに河川沿岸の自然堤防の縁辺に多く分布している。以下、栗山川・木戸川流域を中心に、武射・匝瑳地方の低地遺跡を概観しながら、九十九里平野における古代文化について考察してみたい。

両總国境を貫流する栗山川は、平野部に入ると幾重にも蛇行して、広汎な氾濫原と河畔砂丘を形成、かつては砂丘間に湿地な湖沼群(乾草沼・海老川沼・鳥喰沼)が残されていた。この栗山川の下流沿岸には、光町木戸(10)・桑郷(11)・横芝町本町(12)・上町(13)・宮脇(14)・入間(15)・蓮沼村川面(16)など、数多くの土師式遺跡が分布している。とくに木戸遺跡は、清水教授によつて確認されたもので、從来、国分期の遺跡とみられていたが、小高氏の踏査によつて広汎な貝塚を含む五領期の遺物散布地であることが確認された。木戸遺跡の付近には、低地古墳として注目される尾

(第1表) 九十九里平野の低地遺跡

No.	所 在 地	種 別	遺 物	備 考
1	長生郡一宮町貝塚	貝塚?	縄文	縄文後期
2	本納町橘神社境内	散布地	縄文	縄文中期
3	山武郡白里町四天木沼	*	土師	
4	* 増穂村南郷貝塚	貝塚?	縄文・土師	
5	* 上貝塚	貝塚?	縄文	縄文中・後期
6	福岡村上谷中ノ台	貝塚?	縄文	縄文後期
7	正気村広瀬三ツ塚	貝塚	縄文	縄文後期
8	東金町堀上油免	貝塚	土師	
9	正気村家徳	包含地	独木舟	
10	横芝駅東方	*	独木舟・土師	
11	匝瑳郡東陽村宮内	*	独木舟	
12	白浜村木戸	散布地	土師	
13	栄村稻田開端	*	土師	
14	八日市場町旧新田残沼	包含地	独木舟・櫻	
15	* 大塊18	*	独木舟	
16	* 大塊26	*	独木舟・櫻	
17	* 旧新田	*	縄文・独木舟	
18	豊畠村大塚原	散布地	土師	
19	海上郡矢指村(旧足川村)	包含地	有角石器	
20	香取郡古城村万力	*	独木舟・縄文	
21	山武郡大船村高谷川	*	独木舟	縄文後期

(注1) 本表は清水潤三氏の論文(1954)によって作成した。

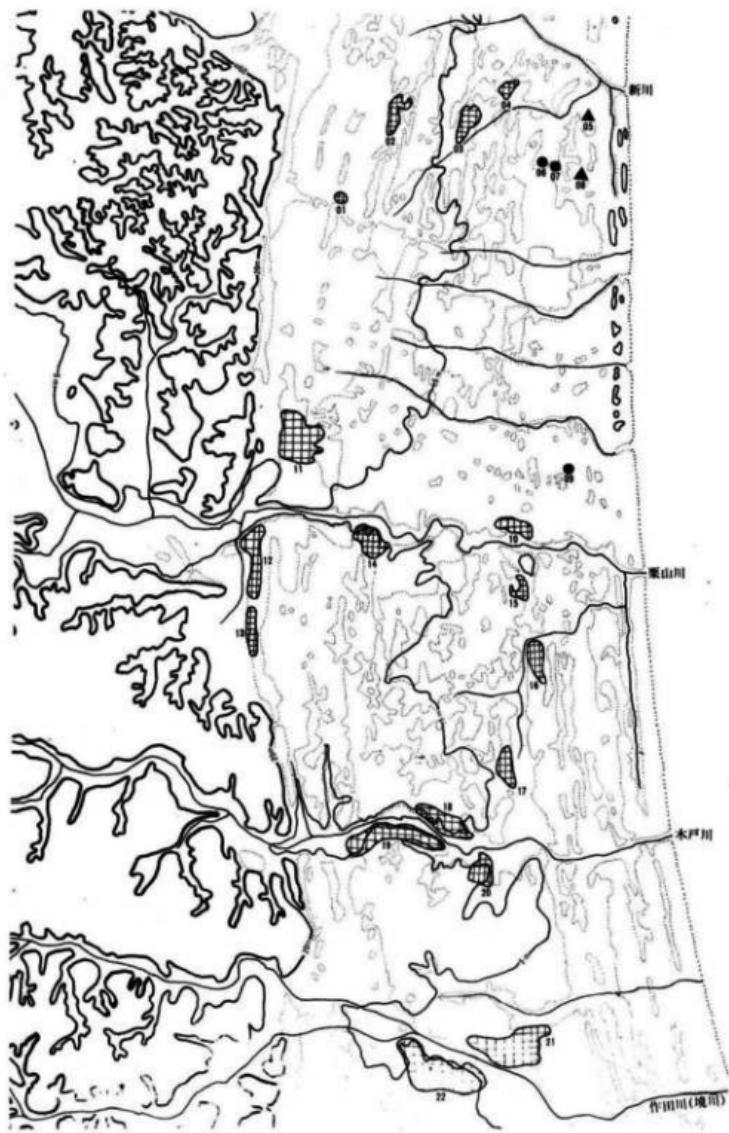
(注2) 遺跡の所在地は旧地名のままとした。

III

九十九里平野のはば中央を流下する栗山川は、その上流部において両總台地を複雑に開析し、奥深い渓谷平野を創出している。縄文早期以降、この渓谷には海水が進入しており、樹枝状台地の縁辺部には大小数多くの貝塚が形成されていた。やがて、稻作農耕を主体とする弥生文化の円熟を経て、豪族的支配関係を基盤とする古墳時代の展開を見るが、栗山川流域の台地上の要所には武社古墳群の古墳と遺物散布地が群集している。九十九里平野の開拓は、この時期から開始されたものらしく、両總各地の河畔砂丘上には内裏塚古墳、尾垂古墳や土師器の散布地など、数多くの低地遺跡が点在している。

(第2表参照) 次頁) この古墳時代以降の土師式遺跡は、両總台地直下の砂丘列に始まり海岸部の砂丘丘上まで、平野部の微高地とくに河川沿岸の自然堤防の縁辺に多く分布している。以下、栗山川・木戸川流域を中心に、武射・匝瑳地方の低地遺跡を概観しながら、九十九里平野における古代文化について考察してみたい。

両總国境を貫流する栗山川は、平野部に入ると幾重にも蛇行して、広汎な氾濫原と河畔砂丘を形成、かつては砂丘間に湿地な湖沼群(乾草沼・海老川沼・鳥喰沼)が残されていた。この栗山川の下流沿岸には、光町木戸(10)・桑郷(11)・横芝町本町(12)・上町(13)・宮脇(14)・入間(15)・蓮沼村川面(16)など、数多くの土師式遺跡が分布している。とくに木戸遺跡は、清水教授によつて確認されたもので、從来、国分期の遺跡とみられていたが、小高氏の踏査によつて広汎な貝塚を含む五領期の遺物散布地であることが確認された。木戸遺跡の付近には、低地古墳として注目される尾



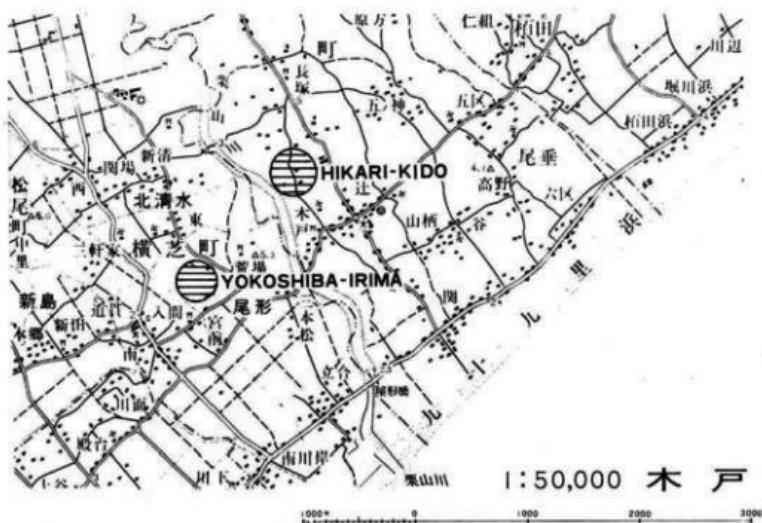
(第2図) 児孫地方の土師式遺跡

これら低地遺跡の面的領域については未確認であるが、すでに古墳時代初頭の五箇期には開拓が始まられ、平安時代になると広域な開発が進められたものと理解される。ところで、遺跡の分布状態で注目されるのは、その多くが河川に面した砂丘の縁辺部に位置することである。このことは、当時の低地開発の様式を示すものと考えられ、地形的制約や土木工事の技術的問題によって、利水の便に恵まれた河川沿岸に限定されたものと推測される。このことから想定される水田經營のあり方は、砂丘列間に残存する湖沼の溜水を利用して水稻栽培を営み、さらに悪水を河川に排水する方式が採用されたものと考えられる。事実、この水源（湖沼）—耕地（本田）—排水路（河川）の利水パターンは、大規模な新田開発が行われる江戸中期まで続いたのである。

IV

ここに紹介する入間遺跡は、数年前、筆者が土師器と推定される素焼土器の破片を表採した場所であり、横芝町屋形字入間に位置する。長倉遺跡の調査後、小高氏の指導を得て、武射地方の低地遺跡を巡回する機会を与えられたが、その実態を把握するため、今回、入間遺跡の精査を実施することとした。

この遺跡は、總武本線横芝駅の東方約七キロに位置し、現状は畑地と湿地とが混交する低地である。遺跡の展開する微高地（畠地）の周辺には、樹枝状の湿地が展開して、幾重にも蛇行しながら、やがて栗山川の本流に連なり、過去の氾濫原であったことが理解される。現在の集落は、五メートルの等高線によって囲まれた微高地で、最高部は東方の三角点付近で五・三〇メートルを測る。土師式遺跡



(第3図) 横芝町入間遺跡地形図



(第4図) 横芝町入間遺跡付近の土地利用

はこれより低い畠地に展開しており、その比高差は約五〇センチを測る。

この遺跡地から検出される遺物は多様であるが、平地の西側、A・B・Cの三地点で素焼土器の散布が確認され、特にB地点が濃厚である。素焼土器の場合、その多くが農耕のために破碎されており、器形を復元することは非常に困難である。B地点での調査では、素焼土器のほかに各種陶器・鐵製品・古錢等が検出され、古代末期以降、中世、近世の各時代を通じて人々が生活したことが窺知される。このような遺物の散布地は、かつては各時代の住居群(村落)が営まれ、その後に廃棄・削平されたものと考えられる。

古代末期、栗山川沿岸には広汎な河畔砂丘と残沼(帯状湿地)が複雑に入り組み、低湿な葦原・雜木林が展開して

いたものと推定される。しかし、この古代的景観も中世・近世の開拓や明治以降の土地改良によって削平・破壊され、当時の自然環境の復元や遺跡範囲の確認はほとんど不可能である。入間遺跡B地点での調査方法は、比較的濃厚に分布する地点を選び、東西・南北各10メートルの範囲に対象区を設定、幅員一・五メートルのトレーンを南北方向に約八メートル延長して、深度〇・五一・〇メートルまで掘り下がた（層序識別不可）。以下、B地点における検出遺物の一部を紹介し、栗山川流域における低地遺跡を考える上での参考資料の一例に供したい。

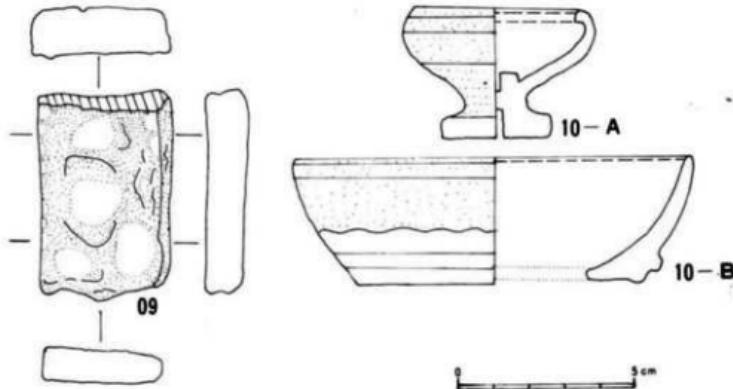
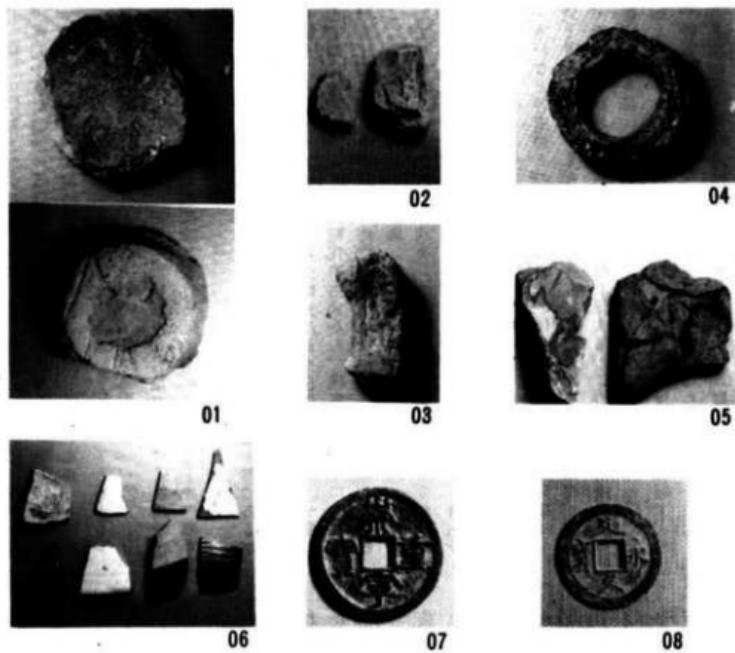
素焼土器（土師器） まず土師器と推定される素焼土器であるが、表面採取されたのは板細破片が多く、土器の形状を推定できるものは極めて少量である。本稿では土師式遺跡を主題としたが、一般に土師器には、はつきり古時代の古式から、現在の神祭りに連なる残存土器まであるが、その時代を決定するには多くの困難さがある。ここに紹介するのは壺形土器（01）と器形不明の破片二点（02・03）である。ます01は径約一八センチを計る壺形土器の底部であるが、混入し、焼成はやや不良で、色調は暗褐色を呈する。外面にはヘラナデが施され、底部はヘラキリとみられるが、技法的にやや粗悪である。この遺物の年代判定はやや困難であるが、隣接する宮脇・川面・木戸など各遺跡との比較において、国分期と推定しても問題はないと考えている。また、02・03の破片は器形は不明であるが、胎土・焼成とも良好で、色調は茶褐色を呈する。このほか、素焼土器の極細片が多量に検出されたが、その多くは中世・近世以降の残存土師と考えられ、01・02・03に比較すると胎土・焼成とも良好で、やや硬質で色調も赤褐色を呈するものが主体を占める。

各種陶器 この遺跡から検出される陶器類は豊富で、施釉陶器と

として注目されるのは10-A・Bの二点である。まず10-Aの鉄軸陶器（燭台？）であるが、黒褐色に施釉された完形品で、口徑四・八センチ、胸部径五・五センチ、底径三・五センチを計り、底部中央に径約四ミリの釘孔がある。胎土・焼成とともに良好であるが、施釉にややムラがあり、口縁部と底部に使用痕が著しい。つぎに10-Bの黄緑色に施釉された鉢形陶器であるが、その復元法量は口徑約一一センチ、器高三・七センチ程度と推定され、胎土は灰白色の陶土で、焼成はやや不良で、器の上部まで施釉されている。そのほか、常滑窯・播磨・伊賀器・燈明皿等の破片（06）が多量に検出され、いずれも江戸時代中期～幕末・維新期の日用雑器である。

砥石・鉄製品 09の遺物は地表下約二五センチの位置から検出されたもので、黒灰色を呈する石英安山岩を素材とする砥石である。かなり磨滅しており原形は不明であるが、本来はやはり方柱状を呈していたと考えられ、現存のものは三・八センチ×一・三センチの角断面で長さは五・七センチを計る。遺物の平面部には細かい使用痕が無数に残っており、鎌・鋸など農具を研磨するために使用された携帯用砥石であったとの考えられる。また、この遺物が検出された耕作土中からは、各種の陶器（染付・常滑）や崇寧重宝（07）・文久永宝（08）あるいは環状鉄製品（04）・瓦片（05）などが伴出しており、この遺物が近世以降の農耕時に使用されたものであることを物語っている。

以上、B地点における検出遺物の一部であるが、遺物總量は約四〇点を数え、その多くが中世・近世以降のものである。ここで注意したいのは、平地全体に散布する素焼土器の年代判定であるが、いわゆる古式土師と残存土師との識別規準の問題である。入間遺跡B地点の場合、国分期に属するとみられる少量の古式土師を含みながら



(第5図) 入間遺跡表採遺物

—写真は縮尺不同一

荒久台遺跡

発刊 昭和56年3月31日

著者 伊藤 一男

出版 横芝町教育委員会

(非売品)

製作 錦喜書房 千葉県成山市大字加1296
TEL0471(58)6035

題字：井上 武